

財松江市教育文化振興事業団
文化財調査報告書第4集



文化財委員会
シンボルマーク

敷居谷古墳群発掘調査報告書1

1994年3月

松江市教育委員会
財松江市教育文化振興事業団

例　　言

1. 本書は、平成5年度においてカナツ技研工業株式会社からの受託事業として（財）松江市教育文化振興事業団が実施した敷居谷古墳群（1・2・5号墳）発掘調査にかかる報告書である。

2. 発掘調査期間 1・2号墳 着手 平成5年9月7日
完了 平成5年10月21日
5号墳 着手 平成5年10月22日
完了 平成5年11月11日

3. 調査の組織は下記の通りである。

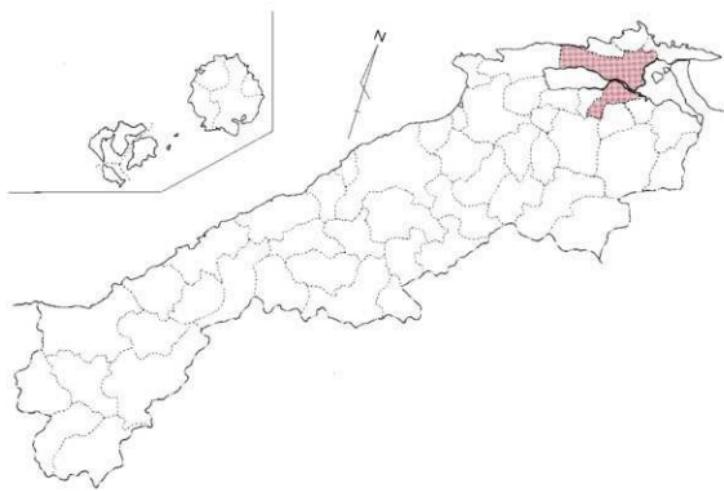
委託者	カナツ技研工業株式会社	代表取締役	金津 敬
受託者	松江市代表者	松江市長	石倉孝昭（平成5年11月まで） 宮岡寿雄（平成5年12月から）
主体者	松江市教育委員会	教育長	諏訪秀富
		生涯学習部長	中西宏次
		文化課長	村松 栄
		文化財係長	岡崎雄二郎
実施者	（財）松江市教育文化振興事業団（平成5年7月から）		
		理事長	吉岡俊雄
		事務局長	日高稔夫
		埋蔵文化財課調査係長	中尾秀信
調査者	（財）松江市教育文化振興事業団 埋蔵文化財課		
		調査係調査員	飯塚康行
		同 嘱託員	富田茂雄

4. 調査の実施にあたっては、次の方々の指導と協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

金津 敬（カナツ技研工業株式会社代表取締役）、金津任紀（同常務取締役）、上田 勉（同取締役土木工事部長）、森脇凱人（同営業部次長）、中村明経（同営業部課長代理）、高橋利正（同土木工事部課長代理）、吉田毅裕（同土木工事部主任）（敬称略）

5. 川土遺物はすべて松江市教育委員会で保管している。

6. 本書の編集及び執筆、図面の作成等はすべて飯塚が行った。



島根県地図



松江市地図

目 次

1. 調査に至る経緯	5
2. 周辺の歴史的環境	5
3. 調査の概要	
(1) 1号墳について	9
(2) 2号墳について	15
(3) 5号墳について	19
4. 小 結	25

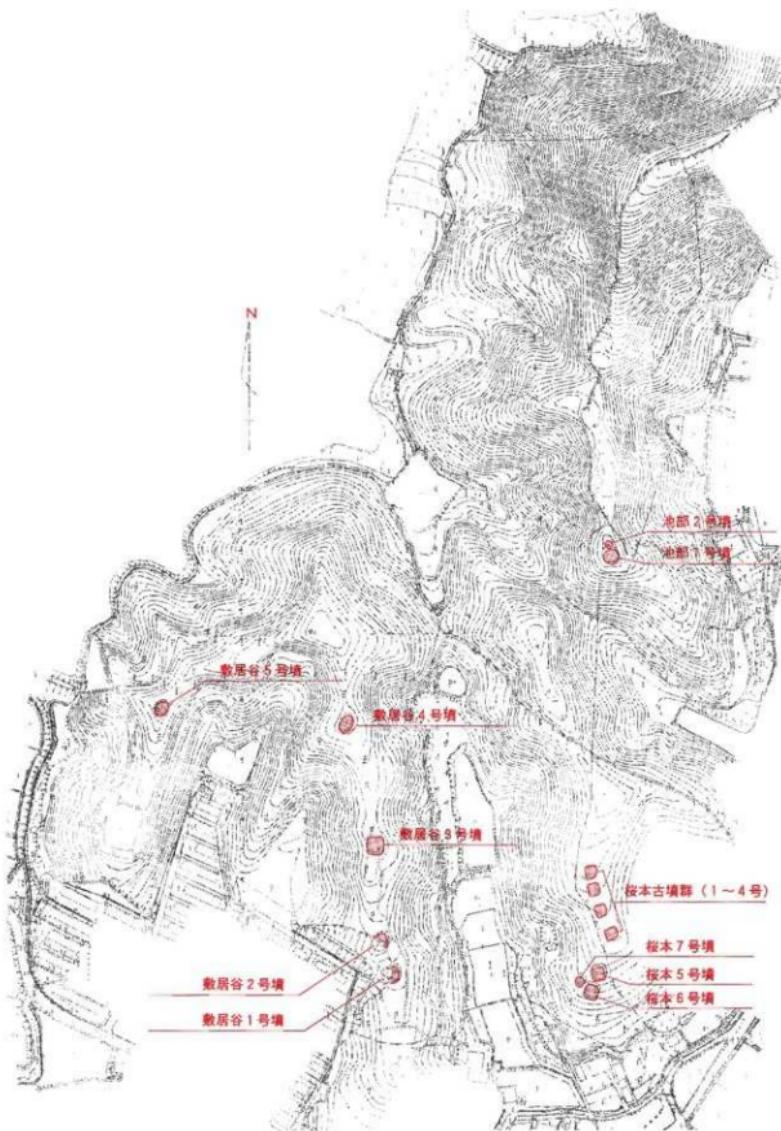
文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会（現文化庁）が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である斗^ト、すなわち斗と棟^{モチ}の組み合せによって全体で軒を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財といふみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していくこうというものです。



文化財愛護
シンボルマーク



第3図 数居谷古墳群全体図

1. 調査に至る経緯

敷居谷古墳群は松江市街地北方、東生馬町の低丘陵上に所在する方墳3基、円墳2基からなる古墳群である。

本追跡は、本区域においてカナツ技研工業株式会社が住宅団地の造成を計画した際に分布調査の結果発見された。本区域において造成工事は平成5年から遺跡部分を除外して進行中であり、工事の進捗状況に合わせて平成5年度においては古墳群中1、2、5号墳の発掘調査を実施することとなった。

2. 周辺の歴史的環境

敷居谷古墳群は、松江市街地より北西方向の東生馬町字敷居谷に所在する。

生馬の地名の起りは「出雲国風土記」の中に見られる生馬神社の祭神、八尋錄長彦命の祀に由来するもので、「吾が御心、平明にして慎まず」から取られたものであると言われており、この里が平和で明るい土地であったことを窺わせるものである。

本遺跡周辺の遺跡に眼を転じると、遺跡の数は近年の分布調査の成果により増加してきたものの、西方の古江～浜佐陀地区、東方の法吉地区はほど大規模な古墳や目立った遺跡はないようと思われる。

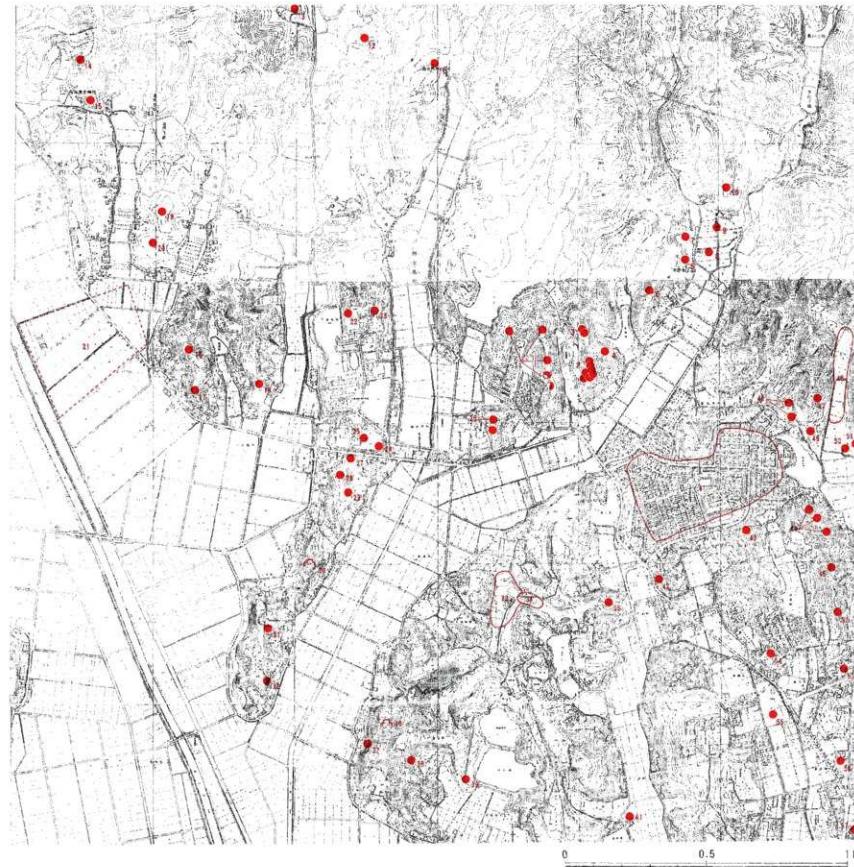
生馬地区の遺跡を迫ってみると、まず縄文時代の遺跡は現在までの時点では確認されておらず、弥生時代に入ってから人々の生活の営みの跡を窺うことができる。すなわち、「元井手遺跡」(No.23)、「名尾遺跡」(No.25)、である。いずれも散布地として周知されている遺跡で、弥生土器片が採集されているが、遺構に伴うものではないことが惜しまれる。

続く古墳時代になると、この地には古墳や横穴墓が数多く見られるが、いずれも小規模な古墳で平野を望む小高い丘陵の尾根筋上を利用して築造されている。このうち概要の知られるものは少ないが、「かいつき山古墳」(No.26)では内部施設に礎壇を持つもの、「名尾丘古墳」(No.24)では埴輪を持つもの、「桜木古墳」(No.4)では横穴式石室をもつことが知られている。この時期の住居跡は知られていないが、「東生馬遺跡」(No.7)、「宮ノ下遺跡」(No.9)などの山麓の散布地から須恵器片が発見されているため、付近の山の緩斜面を利用した人々の生活があったものと推定される。また、「平遺跡」(No.6)では、玉作りに使用する筋砥石が祀られており、玉作り工人の存在する可能性も考えられる。

古墳時代以降になると、遺跡の数は少なくなるが、「平ノ前廃寺」(No.8)から軒丸瓦、「荒張古墓群」(No.20)から五輪塔、「かいつき山古墳」(No.26)の墳頂部で宝篋印塔相輪部と礎敷きの基壇が発見されている程度である。

第1表 周辺の遺跡一覧表

No.	名 称	所在地	種別	概 要
1	敷居谷古墳群	東生馬町	古墳群	方墳4基、円墳1基
2	桜本古墳群	"	"	方墳7基、円墳1基
3	池部古墳群	"	"	円墳2基
4	桜本古墳	"	古 墳	横穴式石室、直刀、土器。(別称)ガランサン古墳
5	法恩寺遺跡	"	散布地	石斧
6	平遺跡	"	"	筋砥石1,(記ってある)
7	東生馬遺跡	"	"	須恵器片
8	平ノ前麻寺	"	寺院跡	柱穴、軒丸瓦
9	宮ノ下遺跡	"	散布地	須恵器片
10	辺田横穴群	"	横穴群	土製支脚
11	大宮遺跡	西生馬町	散布地	石斧
12	郷戸横穴群	"	横穴群	
13	後谷横穴群	"	"	5穴(4穴消滅)
14	かねじ谷横穴群	上佐陀町	"	2穴
15	慄望古墳	"	古 墳	円墳
16	皆美山1号墳	下佐陀町	"	円墳
17	皆美山2号墳	"	"	墳形不明、石棺1、須恵器片。(消滅)
18	松橋古墳群	"	古墳群	方墳2基、円墳1基、須恵器片。(消滅)
19	荒張古墳	西生馬町	古墓群	方墳
20	荒張古墓群	"	"	五輪塔、石塔
21	佐陀川流域条里制遺跡	"	衆里制	消滅
22	高専敷地内古墳群	"	古墳群	方墳3基、(消滅)
23	元井手遺跡	"	散布地	弥生土器片
24	名尾丘古墳	"	古 墳	方墳、埴輪、土師器。(消滅)
25	名尾遺跡	"	散布地	弥生土器片
26	かいづき山古墳群	東生馬町	古墳群	方墳2基、砾櫛、土師器。(消滅)
27	名尾荒神古墳	鹿 津 町	古 墳	円墳
28	大北古墳	"	"	方墳
29	L36古墳	"	"	方墳
30	高柳城跡	"	城 路	山城
31	北垣古墳	"	古 墳	方墳
32	船津横穴	"	横 穴	4穴以上(半壙)
33	ゴルフ場内古墳群	比 津 町	古墳群	3基以上(消滅)
34	ゴルフ場内横穴群	"	横穴群	(消滅)
35	水酌崎横穴群	"	"	5穴、須恵器(半壙)
36	鷺津殿山城跡	鹿 津 町	城 路	山城
37	東前横穴群	浜佐陀町	横穴群	
38	殿山横穴群	"	"	刀子、須恵器
39	小池谷横穴群	"	"	2穴、刀、人骨、須恵器。(消滅)
40	比津小丸山古墳	比 津 町	古 墳	前方後円墳
41	月延古墳群	"	古墳群	方墳等21基、石棺、砾床、盤電鏡、玉類、埴輪、鉄器。(消滅)
42	ひゃくだ横穴	"	横 穴	四注式窓入、家形石棺
43	久米遺跡	法 吉 町	散布地	須恵器片
44	久米古墳群	"	古墳群	方墳3基
45	唐梅古墳群	"	"	方墳4基
46	田中谷古墳群	"	"	前方後方墳1、方墳1
47	下り松窓跡	"	窓 跡	須恵器
48	田中谷遺跡	"	散布地	弥生土器、須恵器、石斧
49	曾田虎一郎邸上古墳群	"	古墳群	円墳2基
50	塚山古墳	"	古 墳	方墳、円筒埴輪
51	下り松遺跡	"	散布地	弥生土器
52	石在趕塚	"	趕 塚	一石一字趕
53	中代遺跡	春 日 町	散布地	石鏡、土師器
54	比津岬横穴群	"	横穴群	須恵器。(消滅)
55	春日遺跡	"	散布地	弥生土器片
56	法吉小裏山横穴群	"	横穴群	土師器、須恵器。(消滅)
57	摩利支天山横穴	"	横 穴	



第4図 周辺の遺跡分布図

3. 調査の概要

(1) 1号墳について

本墳は南北に延びる低丘陵上に所在し、群中では最南端の標高約31mを測る位置に築造されている。本墳の存在する丘陵は、西接して松江工業高等専門学校官舎を造成した際に法面として尾根筋から西側は掘削されているため、古墳発見時には既に西半分の墳丘は欠損しており、半壊の状態となっていたが、残存する墳丘からおよそ一辺11mを測る方墳であるものと想定された。

1号墳の調査は、土層観察用の柱を丘陵尾根筋に平行と直交する形で十字に設定して地山面まで掘り下げた。

ア) 墳丘について

調査の結果、南北長12.5m、墳裾からの比高最大1.4mを測る方墳であることが判明した。

墳丘の築造方法は、まず地山面から周濠を掘り、一辺12.5mの方形の墳丘基盤を形成し、旧表土上に盛土を施して整形し、墳頂部に一辺約7mの方形の平坦面を造る。最大盛土高は墳丘中心部分で約50cmを測る。盛土は周囲の地山を削って使用したものと考えられ、非常に粘性の強い土質である。

イ) 周濠について

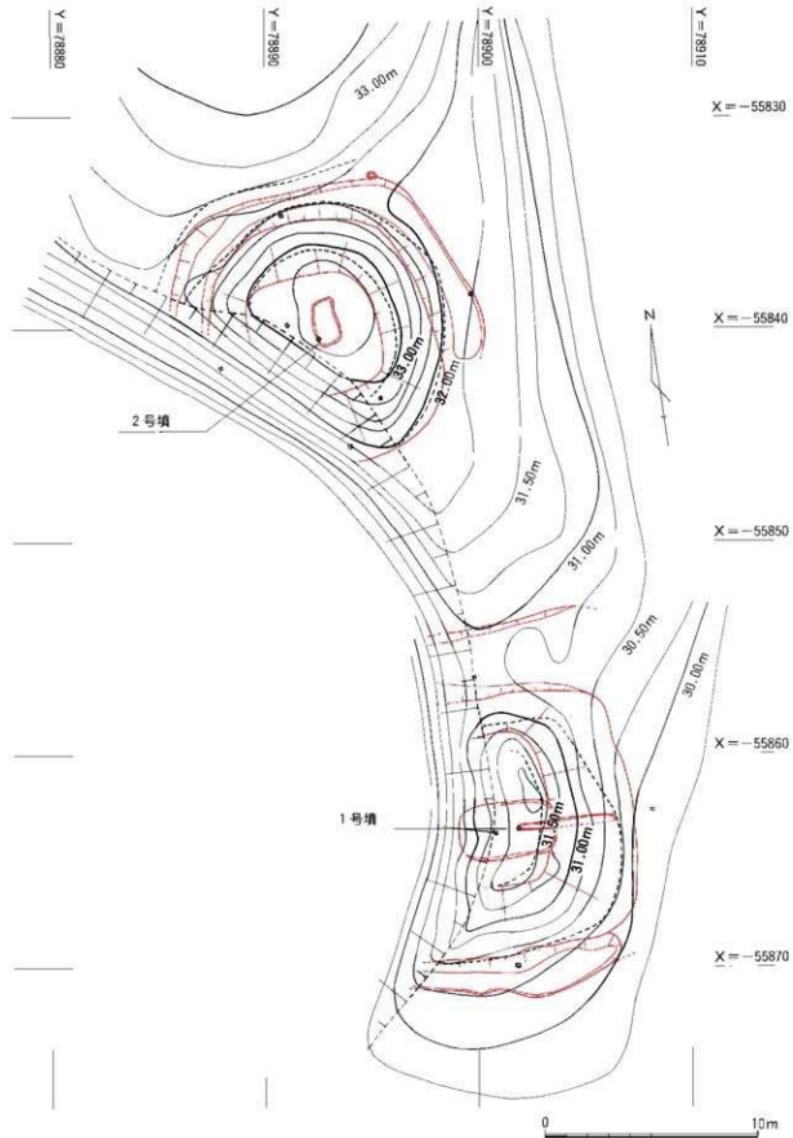
墳丘南辺と北辺ではそれぞれ周濠が検出された。東辺では検出されなかったが、東側墳裾は後世に削平を受けた状況が観察されるため、本来は木墳の周囲を巡っていたものと推定される。

南側周濠は幅1.3~2.3m、深さ20~30cmを測り、淡黒褐色土の堆積が見られた。この周濠内の出土遺物はなかったが、周濠が途切れた東方延長土地山面で若干の須恵器片が検出された。北側周濠は、南側のそれに比して幅広であり、幅3.2~4m、深さ20~30cmを測る。周濠内には暗灰色土の堆積が見られ、この上層上面から周濠底面にかけて須恵器壺、盤、甕がそれぞれ1個体分検出されたが、接合の結果、いずれも完形にはならないものである。

ウ) 主体部について

本墳の墳頂中心部は攪乱された痕跡があり、軋轍の攪乱土を除去すると、幅2.5m、長さ4.5m以上、深さ約45cmの隅円方形の掘り込みが検出された。

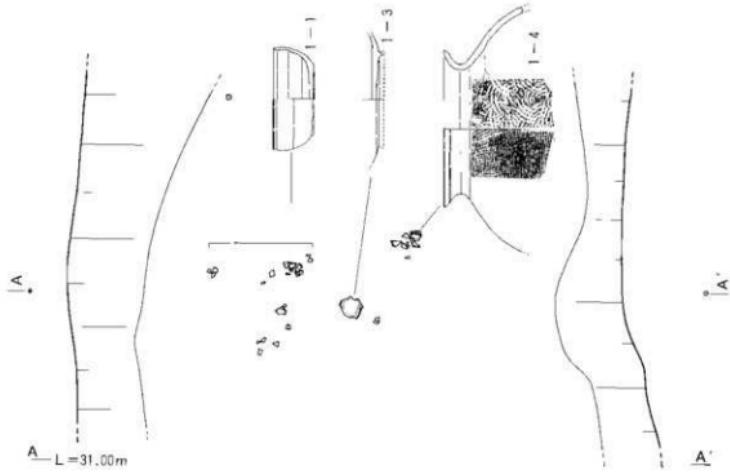
出土遺物はなかったが、本来主体部であったものと推定される。本墳南側墳裾では、表土上から表土直下にかけて季大~人頭大程度の礫が多数散乱しており、同じ石材がこの墓壙埋土中からも数個出土していることから、後世に盜掘を受けた際に埋葬施設に利用された石材が排出されたものと推定される。これらの石材を利用した埋葬施設としては、木棺の周囲を礫で囲んだ櫛櫛様のものが推定される。また主体部床面中央部から東側墳裾にかけて幅30cm長さ4.7m、深さ5cm程度の浅い溝状造構が検出されたが、これが排水施設であればかなり入念な施設を持つ主体部であったことが考えられる。



第5図 敷居谷1、2号墳調査前地形測量図

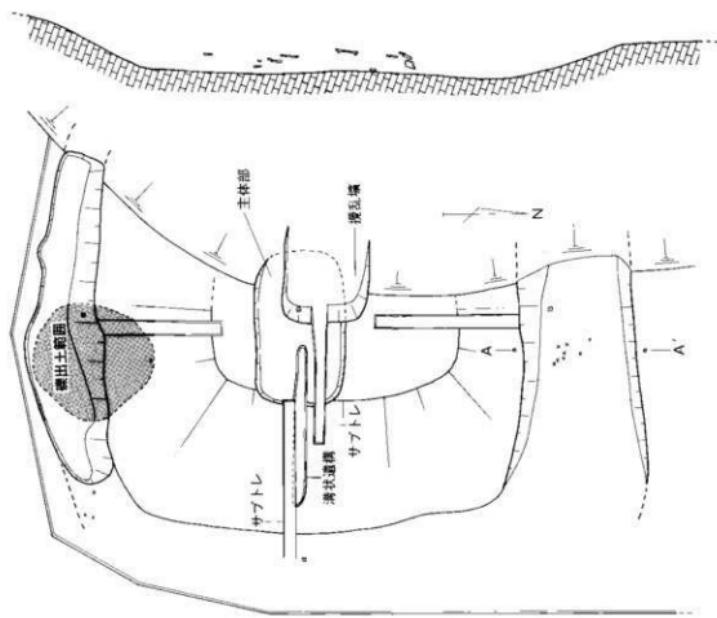
0 0.5m

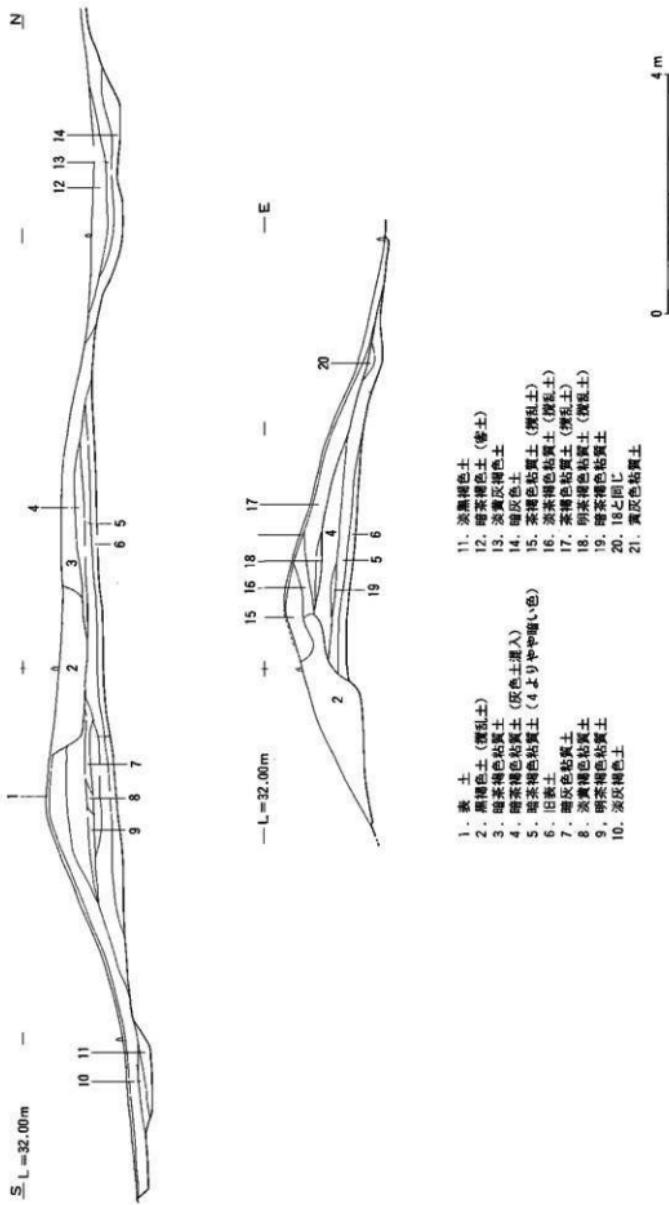
1号墳北側周濠土器出土状況 ($S=1/20$)



0 5m

第6図 1号墳調査後平面図 ($S=1/100 \times 70\%$)

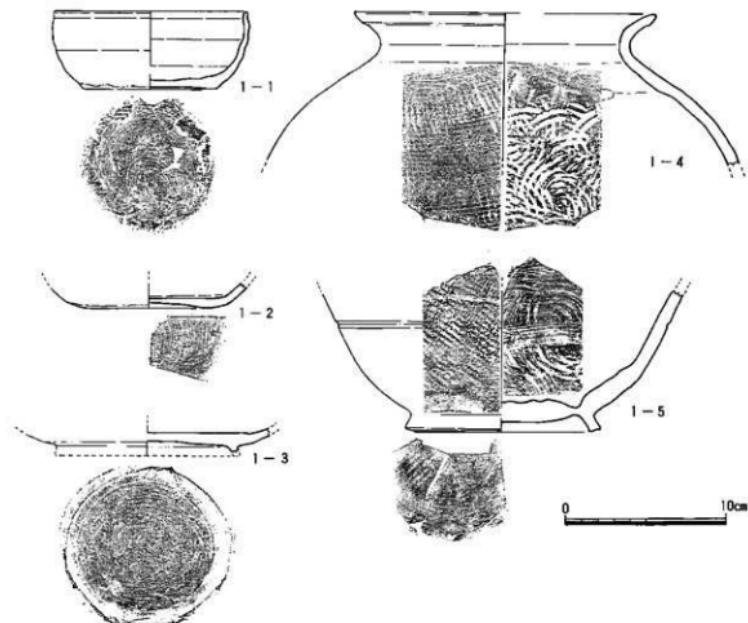




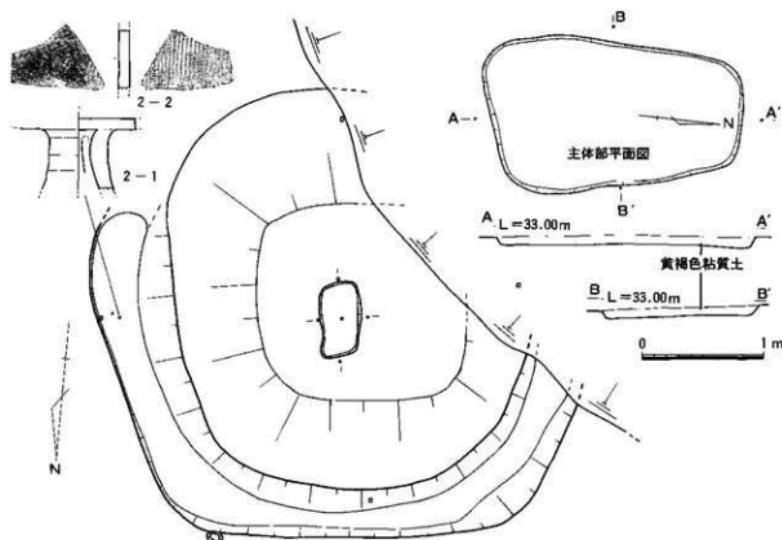
エ) 出土遺物について

1号墳の出土遺物は南側周濠及び北側の周濠中から検出された。いずれも須恵器である。

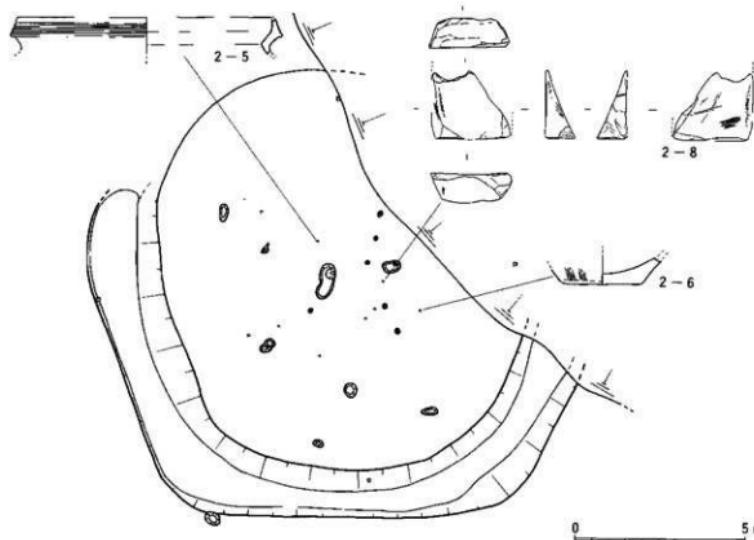
- ・ No 1-1は北側周濠から検出された須恵器杯である。口径12.2cm、器高5.0cmを測る。杯部内外面ともに回転ナデ、杯底部内面は不整方向のナデで仕上げ、底部外面は回転糸切りで切り離す。形態及び手法の特徴から8c代に属するものと考えられる。
- ・ No 1-2は北側周濠から検出された須恵器盤である。口縁部、脚端部を欠損するために形態は明らかでないが、脚部径はおよそ11.6cm程度のものであると考えられる。底部外面は回転糸切りで切り離した後、軽くナデで仕上げる。
- ・ No 1-3は埴丘掘削中に検出された須恵器杯類の破片であるが、口縁部を欠損するために形態は不明である。底部外面に糸切り痕が観察される。
- ・ No 1-4は北側周濠から検出された須恵器壺である。口径19.1cmを測る。口縁部～肩部の破片しか検出されなかったが、外面はタタキの後にカキ目調整、内面には同心円状のあて具痕跡が残る。
- ・ No 1-5は南側周濠が東側で途切れた延長線上から検出された須恵器壺の底部破片である。底部に高台を付けたもので、底径10.8cmを測る。胴部外面及び底部外面にタタキ、内面にあて具痕が残る。



第8図 1号墳出土遺物 (1/3)



2号墳丘平面図



第9図 2号墳旧表土面検出状況 ($S=1/100 \times 70\%$)

(2) 2号墳について

本墳は、1号墳から北方へ約10mの間隔を置いた丘陵上に所在し、標高約32.5mの位置に築造されている。

本墳も1号墳同様、松江工業高等専門学校官舎造成の際に法面として掘削されており墳丘南西隅部分約1/4を欠損しているが、残存する墳丘からおよそ一辺12mの方墳であるものと想定された。

2号墳の調査は、土刷観察用の畦を墳丘を十字に切る形で設定して地山面まで掘り下げた。

ア) 墳丘について

調査の結果、南北長12.5m、東西長約10m(推定)、墳丘からの比高最大1.2mを測る方墳であることが判明した。墳丘の築造方法は、まず地山面から周濠を掘り、12.5m×10mのやや長方形の墳丘基盤を形成し、旧表土上に盛土を施して墳頂部に一边約6mの方形の平坦面を造る。最大盛土高は墳丘中心部分で約1mを測る。盛土は1号墳と同様に周囲の地山を削って使用したものと考えられるが、非常に粘性の強い土質である。

イ) 周濠について

周濠は墳丘北半分を巡る形で検出された。南辺及び東辺の一部は検出されなかつたが本来は墳丘の周囲を巡っていたものと推定される。この周濠は幅1.4~2.4m、深さ10cm~35cmを測る。

周濠内には淡黒褐色土の堆積が見られ、東側周濠部分のこの上層上面において須恵器の高杯片、菱片がそれぞれ1片ずつ、北東コーナー部分の周濠検出面において須恵器の長頸壺と思われる肩部破片が検出された。

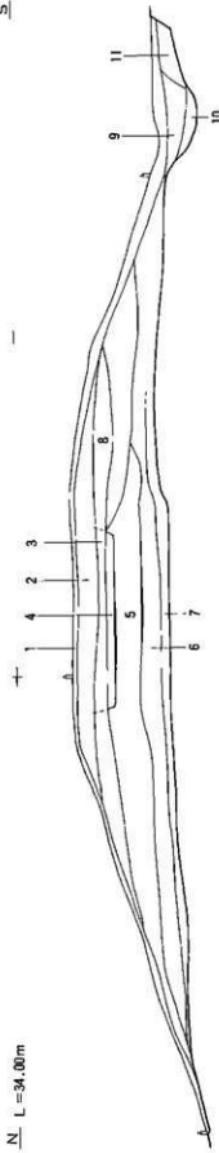
ウ) 主体部について

墳丘の盛土第3層を除去した段階で、南北方向に主軸をとる2.2×1.4m、深さ10cmの墓壙が検出され、周囲の盛土と非常に近似した土質の黄褐色粘質土が堆積していた。墓壙内部からの出土遺物は皆無であったが、墓壙は本来は検出面より上の第3層上面もしくは第2層上面から掘り込まれていたものと推定される。

エ) 旧表土面について

調査後、墳丘を断ち割りした段階で旧表土面から弥生土器片が検出されたため、断ち割りのトレンチを拡張する形で盛土を除去し、旧表土面を精査した。その結果、盛土中に含まれる形で弥生土器甕類底部片、瓶のものと推定される把手状の製品が1片検出され、旧表土面からは弥生土器甕類口縁部片若干と磁石1個が検出された。またビットが9穴検出されたが、不整形な浅いものであり、柱穴には成り得ないものと判断され、小規模なビットは樹木根の痕跡であろうと推定される。

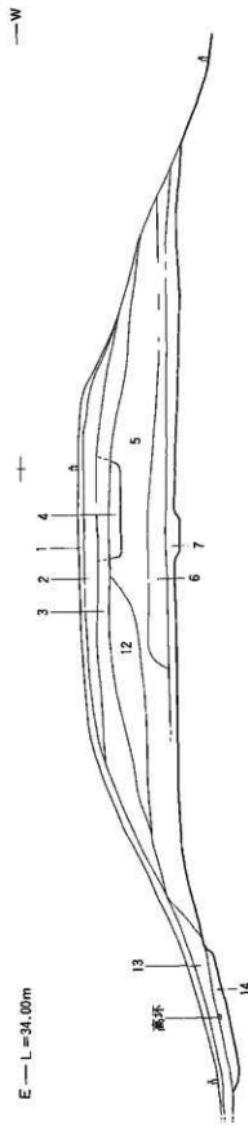
S



W

+

E — L = 34.00m



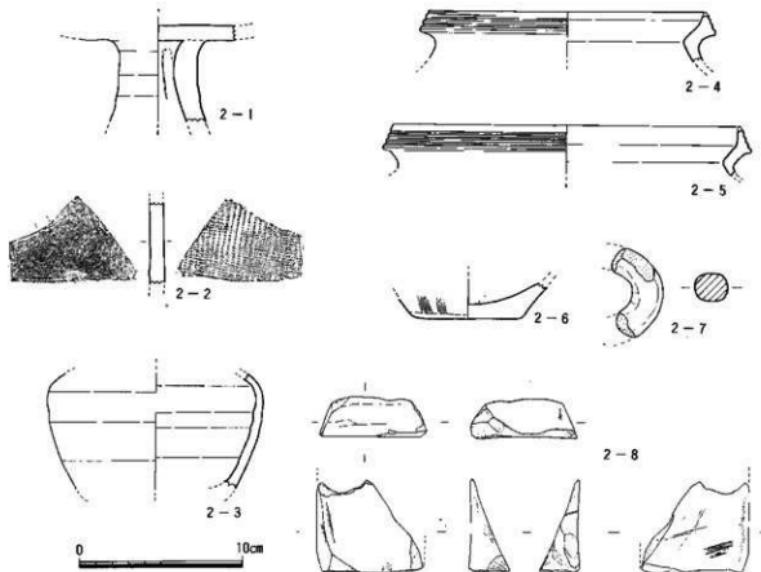
- 1. 砂土
- 2. 淡黃褐色粘質土
- 3. 明黃褐色粘質土
- 4. 黃褐色粘質土
- 5. 黄褐色粘质土(灰色土混入)
- 6. 淡灰色土
- 7. 旧表土
- 8. 淡黃褐色粘質土
- 9. 灰褐色土
- 10. 淡黃褐色土
- 11. 淡黃褐色粘質土
- 12. 5よりやや暗い色
- 13. 灰褐色土
- 14. 淡黃褐色土

第10圖 2号填塗丘土層断面図 ($S=1/40 \times 70\%$)

オ) 出土遺物について

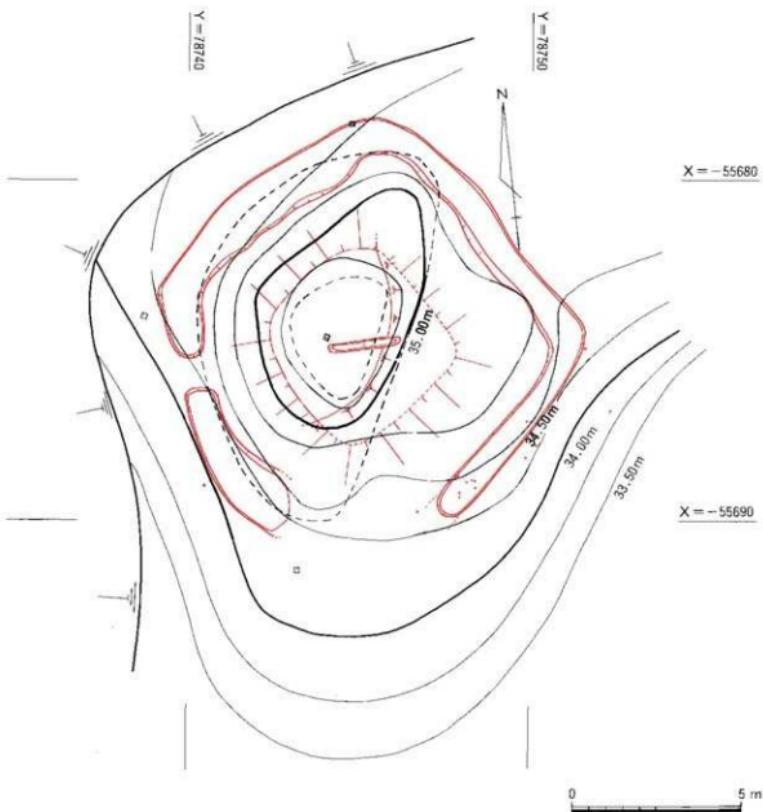
2号墳の出土遺物は周濠中及び墳丘盛土除去後に旧表土面上から検出された。

- ・ No 2-1 は東側周濠で検出された須恵器高杯片である。杯部以上、脚部以下を欠損するため形態は不明であるが、おそらく杯部は浅く広く開き、脚部は高く裾部で大きく開くタイプのものであろうと推定される。
- ・ No 2-2 はNo 2-1と同地点で検出された須恵器壺類の胴部片である。外面にタタキ痕跡、内面に同心円状のあて具痕跡が見られる。
- ・ No 2-3 は周濠の北東コーナー部分で検出された須恵器長颈壺の肩部片である。肩部以上及び底部を欠損しているため形態は不明であるが、最大胴部径13.2cmを測り、内外面ともに回転ナデで仕上げる。
- ・ No 2-4, 5 は旧表土面で検出された弥生中期の壺類口縁部の破片であり、口径はそれぞれ17.2cm, 24.6cm(復元径)を測る。いずれも口縁端部を上下に拡張し、外面に3条の凹線文を施すものである。
- ・ No 2-6 も第6層中に含まれていたもので、弥生土器壺類の底部片である。底径6.6cmを測り、No 2-4, 5 と同種のものと推定される。



第11図 2号墳出土遺物 (1/3)

- ・No 2～7は第6層中に包含されていたもので、額の把手状を呈する製品である。
- ・No 2～8は旧表上面で検出された砥石である。折損しているが、小口部一面のみに自然面を残し、残りの面は全て使用したものと推定される。かなり使用したものと見られ、使用面が湾曲しており、一部擦痕が観察できる。



第12図 敷居谷5号墳調査前地形測量図 ($S=1/100 \times 70\%$)

(3) 5号墳について

本墳は、1, 2号墳の所在する丘陵の西方に南北に延びる丘陵の尾根筋上、標高約34mを測る位置に築造されている。

発見時点には、墳丘の東側約半分の盛土が既に失われていたため、径約8.5mの円墳であるものと観察された。

5号墳の調査は、上層観察用の駐を丘陵尾根筋に平行と直交する形で十字に設定して地山面まで掘り下げた。

ア) 墳丘について

調査の結果、一辺9m、墳幅からの比高最大1.2mを測る方墳であることが判明した。

墳丘の築造方法は、まず地山面から周濠を掘り、一辺9mの墳丘基盤を形成し、墳頂部に一辺約5m(推定長)の方形の平坦面を造る。最大盛土高は墳丘中心部分で約60cmを測る。盛土は周囲の地山を削って使用したものと考えられるが、いずれも非常に粘性の強い土質である。

イ) 周濠について

墳丘北部コーナー部分を除いて、墳丘を方形に巡る形で周濠が検出された。この周濠は、幅0.75~1.2m、深さ15~40cmを測る。

周濠内には淡灰褐色~淡黒褐色の堆積土があり、周濠南コーナー部分から東部分にかけての周濠内及び周濠付近から須恵器の壺蓋2個体(Na1, 4), 壺類4個体(Na3~6), 盆1個体(Na7), 上部器の小形壺と思われる細片若干が検出された。このうち壺蓋Na1は、周濠が途切れた延長上から検出されており、本来はこの上器を含んで更に延びていた可能性が考えられる。これらの土器はNa1以外は全て破片で発見されているが、それぞれの破片は散在していないため、この位置に供えられたものと考えられる。

壺Na6及び盆Na7は、いずれも底部に糸切り痕跡を残すものであるが、周濠検出面より若干浮いた位置で検出されている。

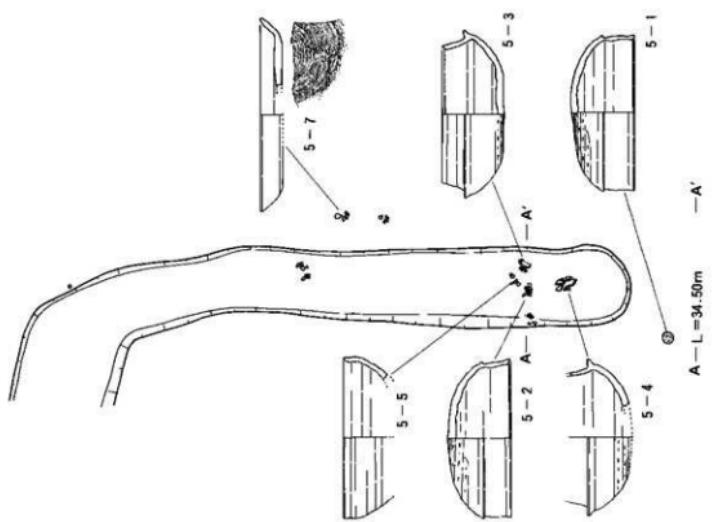
ウ) 主体部について

墳丘の盛土第2層を除去した段階で、東西方向に主軸をとる長さ215cm、最大幅35cm深さ最大20cmの墓壙が検出された。墓壙底部はU字形に近い形状を呈しており、墓壙内部には黒褐色土が堆積していた。墓壙底の形態と、幅の狭さから考えて、木棺があったかどうかは不明である。

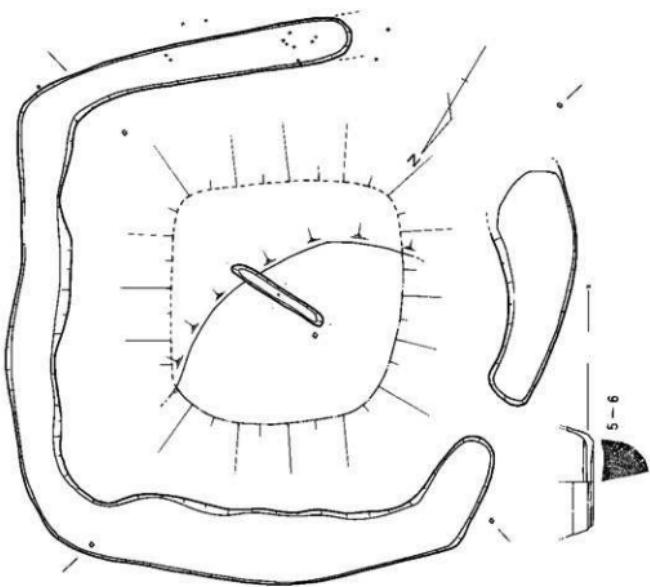
周溝内土器出土状況 ($S=1/40 \times 70\%$)



0 4 m



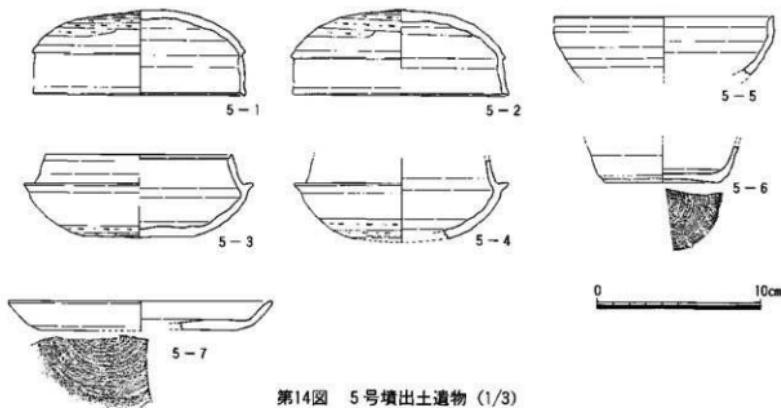
第13図 5号墳調査後築丘平面図 ($S=1/100$)



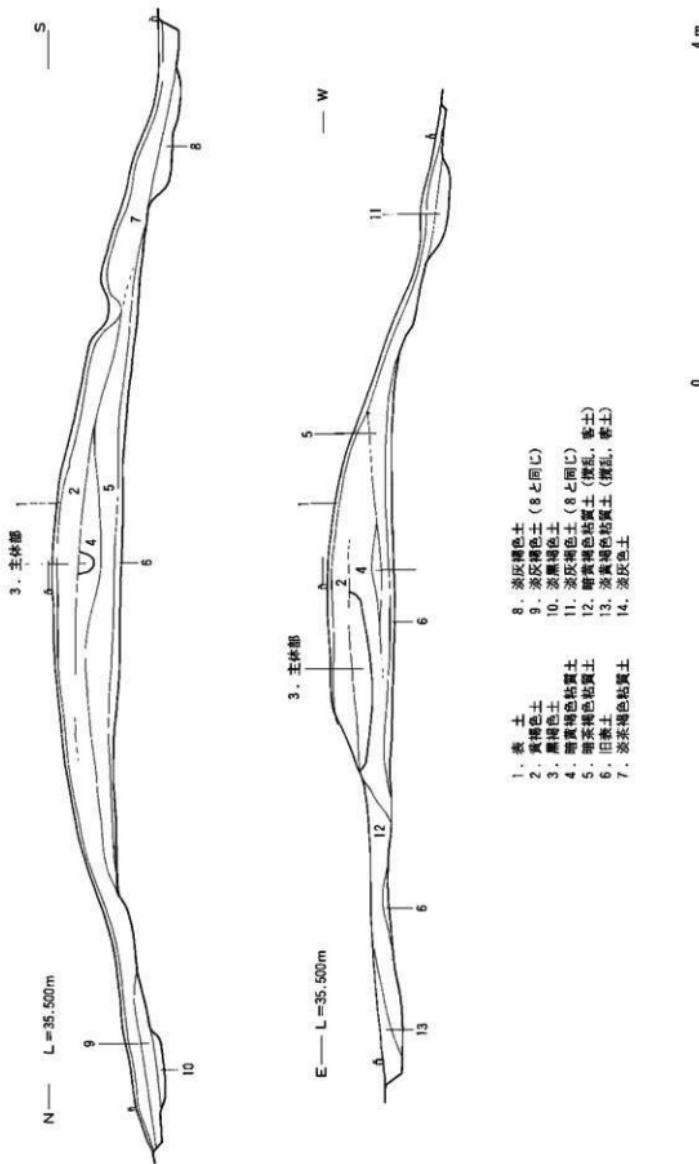
ニ) 出土遺物について

5号墳の出土遺物は周濠中及び周濠付近、墳頂から検出されたものであり、いずれも須恵器である。

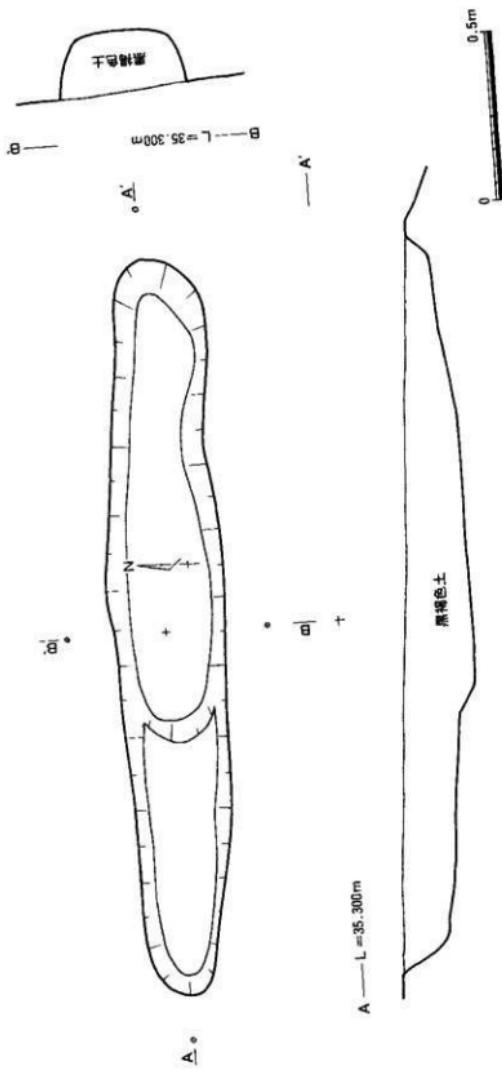
- ・No 5-1は南側周濠延長線上で検出された須恵器杯蓋である。口径13.4cm、器高5.4cmを測る。天井部と口縁部の境外面に鋸い稜を付け、口縁端部には段を有する。手法の特徴としては、天井部外面の1/2以上に回転ヘラケズリを施す。山本編年Ⅰ期に属するが、やや新しい様相も認められる。
- ・No 5-2は南側周濠内で検出された須恵器杯蓋である。口径13.5cm、器高5.4cmを測る。形態、手法共にNo 1と同様であり、同時期のものと推察される。
- ・No 5-3は南側周濠内で検出された須恵器杯身である。口径11.6cm、器高5.3cmを測る。横方向に伸びる受け部からやや内傾して伸び、口縁端部に段を付ける。手法の特徴としては、天井部外面の1/2以上に回転ヘラケズリを施す。山本編年Ⅰ期に属するものであるが、やや新しい様相が認められる。
- ・No 5-4は南側周濠内で検出された須恵器杯身である。口径、器高ともに不明であるが、No 3と同様の個体であると推察される。
- ・No 5-5は南側周濠内で検出された須恵器杯身片である。口径13.4cmを測る。口縁端部付近で屈曲する。底部は欠損しているが、恐らく糸切り痕を残す平底を持つものと考えられ、8c代に属するものと推察される。
- ・No 5-6は西側周濠付近で検出された須恵器杯身底部片である。検出されたレベルは周濠検出面より1層上の土層であり、後世における供獻遺物と考えられるものである。口縁部は欠損しているが、回転糸切り痕を残す底部は径7.2cmを測り、やや小形の器種である。
- ・No 5-7は南側周濠検出面付近から検出された須恵器皿である。口径16.5cm、器高1.85cmを測る。底部外面には回転糸切り痕が見られ、8c代に属するものと推察される。



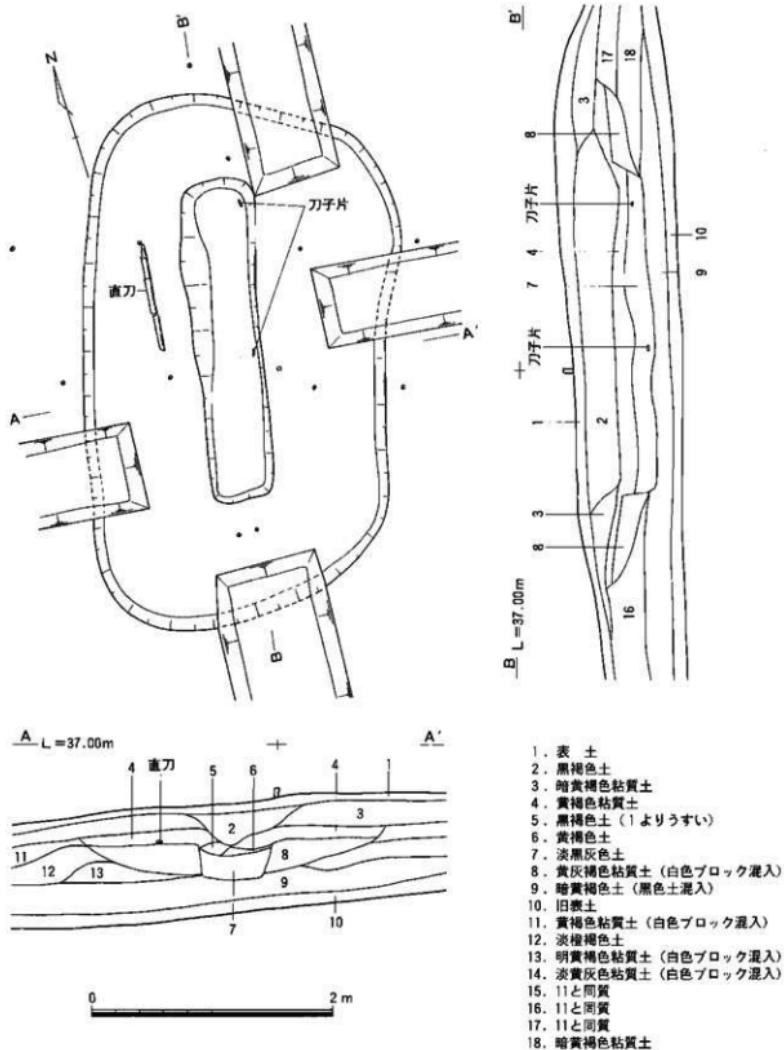
第14図 5号墳出土遺物 (1/3)



第15圖 5号墳墳丘土層断面図 ($S = 1/40 \times 70\%$)



第16图 5号块主体部实测图 ($S=1/10 \times 70\%$)



第17図 3号墳主体部実測図 ($S=1/40$)

4. 小 結

調査の結果、1、2号墳はともに一辺12.5m、5号墳はそれよりやや小さく一辺9mを測る方墳であることが判明した。

それぞれの古墳に共通して見られることは、墳丘裾部に幅0.75~2.4m程度の周濠を巡らせる点であり、いずれの古墳の周濠からも土器が検出されている。周濠内出土の土器に共通することとしては、回転糸切り痕跡を底部外面に留める点であり、8C代の年代観が与えられるものである。しかしこれらの土器は直接築造年代に関与するものではなく、古墳が築造された後の時代に改めて祀られた可能性を示すものである。このように古墳の周濠から古墳時代以降の土器が検出された例は、松江市内にいくつか類例が見出され、管見の限りでは、竹矢町中竹矢後1号墳（註1）、坂本町細曾1号墳（註2）、上乃木町向荒神古墳（註3）などがあり、古墳時代が終焉した後の時代になども広くこのような祭祀行為が行われていたことが窺われる。

今回調査した3基の古墳の築造年代については、いずれの主体部からも山上遺物が検出されず、1、2号墳については前述した8C代の須恵器とII表十面から検出された弥生時代の土器しかなかったために手掛かりとなるのがないが、5号墳の周濠底部からはおよそ山本編年の1期の範囲に含まれる須恵器の蓋環が2セツ検出されているため、これを築造当時の供獻遺物と考えるならば、5号墳には5C末の年代観が与えられる。この5号墳は1、2号墳が存在する丘陵から派生して西側に伸びる丘陵上に立地しているために別支群として捉えざるを得ないが、古墳の規模、構造等、類似していることから同一集団の築造によるものと推察するならば、5号墳とほぼ同時期に相前後して造られたものと考えられる。

本古墳群の被葬者についても知る手掛かりは少ない。1、2、5号墳調査終了時点では、いずれの古墳も主体部中に副葬品を持たず、周濠中の供獻土器のみであることから、それぞれの被葬者間に地位の差も見られず、この生馬地区で農耕を中心とした生業を営む集団の長であろうと推察されたが、現在調査中の3号墳は、ほぼ同規模（一辺12m）の墳丘を持つ方墳であり、北側周濠中には土師器の高环を7個体、主体部には全長2.75mを測る長大な木棺を直葬し、棺内に刀子1個体（2個の破片は接合して1個体となる）、棺外の墓壙掘り方内部には全長92cmの直刀を1振副葬するなど、1、2、5号墳に比べて卓越した感が否めない。また、本群中最高所にある4号墳についてもこれから調査となるため、現時点での推察は差し控えたい。今後の調査結果に期待するものである。

註1)「中竹矢後1号墳・長峯遺跡」松江市教育委員会 1986年

註2)「細曾1号墳」松江市教育委員会 1987年

註3)「向荒神古墳」松江市教育委員会 1992年

図 版



敷居谷古墳群遠景（西方より）



敷居谷古墳群全景（北方より）



敷居谷古墳群全景（南東方向より）



手前：2号墳 奥：1号墳



1号墳調査前近景（北方より）



1号墳南側墳裾集石状況（東方より）



1号墳南側周濠検出状況（東方より）



1号墳南側周濠完掘状況（東方より）



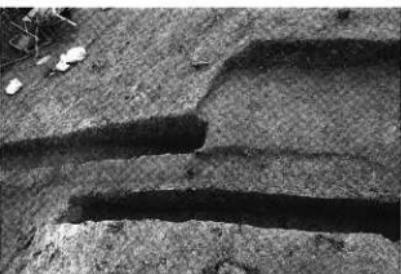
1号墳北側周濠部土層断面状況（東方より）



1号墳北側周濠内土器出土状況（北西方向より）



1号墳主体部内溝状遺構検出状況（北方より）



1号墳主体部内溝状遺構完掘状況（北方より）



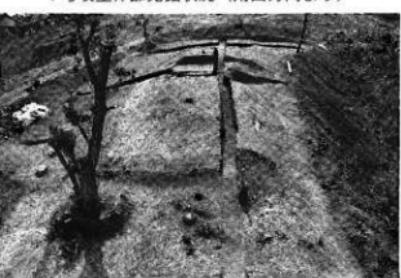
1号墳主体部完掘状況（東方より）



1号墳主体部完掘状況（南西方向より）



1号墳主体部完掘状況（西方より）



1号墳完掘後全景（北方より）



2号墳調査前近景（北方より）



2号墳北東部周濠検出状況（北方より）



2号墳北西部周濠検出状況（北方より）



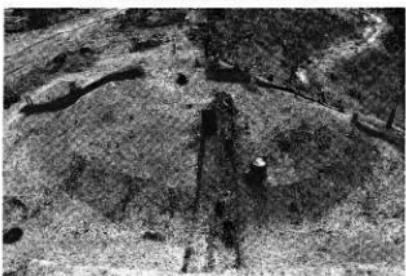
2号墳北東部周濠内土層堆積状況



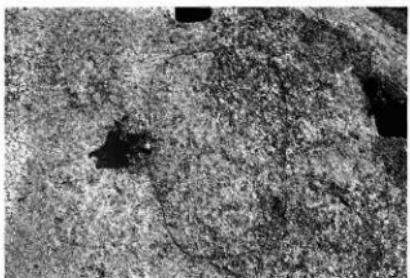
2号墳北西部周濠内土層堆積状況



2号墳北側周濠内土層堆積状況（東方より）



2号墳周濠完掘状況（北方より）



2号墳主体部検出状況（北方より）



2号墳主体部完掘状況（北方より）



2号墳墳丘土層状況（北方より）



2号墳墳丘土層状況（北方より）



2号墳墳丘土層状況（東方より）



2号墳墳丘土層状況（北西方向より）



2号墳旧表土検出状況（北方より）



2号墳旧表土面ピット検出状況（北方より）



5号墳遠景（北東方向より）



5号墳調査前近景（北方より）



5号墳周濠検出状況（北方より）



5号墳周濠土層堆積状況（北方より）



5号墳北東部周濠内土層堆積状況



5号墳北西部周濠内土層堆積状況



5号墳東側周濠内土層堆積状況



5号墳東側周濠内土器出土状況（南方より）



5号墳主体部検出状況（東方より）



5号墳主体部完掘状況（東方より）



5号墳墳丘断割り状況（北方より）



5号墳主体部断割り状況（北方より）



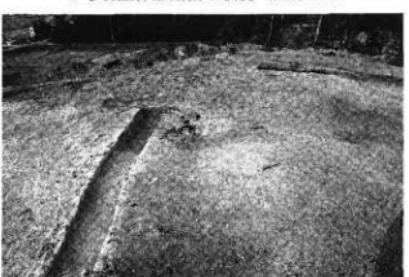
5号墳主体部断割り状況（東方より）



5号墳主体部断割り状況（南方より）



5号墳旧表面検出状況（北方より）



5号墳旧表土除去後（東方より）



3号墳調査後全景（北方より）



3号墳北側周濠内土器出土状況



3号墳北側周濠内出土高坏



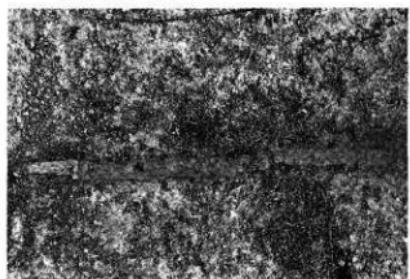
3号墳主体部落込み除去後（南方より）



3号墳主体部木棺痕跡検出状況（南方より）



3号墳木棺痕跡及び直刀出土状況



3号墳出土直刀



3号墳主体部完掘状況（南方より）



1 - 1



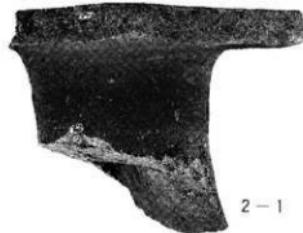
1 - 2



1 - 3



1 - 4



2 - 1



1 - 5



2 - 2



2 - 3

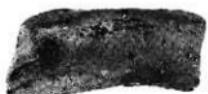


2 - 7

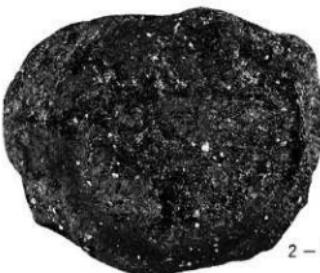
1, 2号出土遗物



2-4



2-5



2-6



2-8



2-8



5-2



5-5



5-1



5-6



5-3



5-7

2. 5号填出土遗物

敷居谷古墳群発掘調査報告書 1

1994年3月

発行 香松江市教育文化振興事業団

印刷 有限公社 高浜印刷所
松江市北側町8